# 留学と趣味と研究

Strasbourg University
金澤　宏樹
（上智大学理工学部）

IBMC はアルザス地方の主要都市ストラスブールに位置する設立 50 年ほどの研究所です。上原記念生命科学財団からの助成のおかげで私はここでポスドクをしています。日本人の感覚では古い建物ですが、フランスではむしろ新しいほうです。写真からもわかるように巻き付いた植物がおしゃれで特徴的ですが、この植物の本来の目的は建設当初とてもひどかった落書きの防止らしいです。研究施設一つからいろいろな意味でフランスらしさを感じられます。写真などで一見した感想と実際に訪れることで知ることのギャップは留学の醍醐味の一つです。

私はこちらでも趣味としてサッカーを続けています。フランス人をはじめとするこちらの方々はとにかくショートパスとドリブルで前方にボールを供給し、隙あらばシュートを打ちます。あまり走らず、パスの精度も良くはなく守備も雑ですが、ゴールキーパー（フランス語ではガーディアン）は上手です。単純で馴染みやすい一方、それが災いして視野が狭くなってしまうときもあります。日本人が好む傾向にあるパスサッカーを嫌うわけではありません。仕事への取り組み方を見ても同様の傾向が見えます。彼らは目標設定が非常に上手く、無駄な仕事は避けますが、細部は雑です。私の知る日本人は細部にまで高精度を求めるため労働時間に対する目標の達成度は低くなりがちに見えてしまい、しかし着実に成果は挙げます。個人的にこの特徴は好きですが、良くも悪くも度を越した高品質です。

私の場合、主な留学目的は自分の研究の遂行と見識を広げることです。私はフランスに来るまではロングパスを通すことなどが好きでした。当初こちらでは他のプレイヤーをまねてシュートばかり打っていましたが、最近は本来持っていた技術を磨くことに重点を置いています。すると、個人としてはゴールを得られませんがチームとしては勝つことが増え、かつ、新しい自分のプレイスタイルを見出すことができました。新たな技術を身につけるにしても、それまでに積み重ねてきた自分の個性を蔑ろにしては有象無象になってしまうところでした。自分自身の個性と価値観を忘れた安易な国際化や海外への順応には危うさを感じます。

近頃の留学目的は従来のそれと比べて変化しつつあるという印象を私は持っています。近年、留学者数は減少傾向にありますが、これは若者の冒険心が失われているのではなく、日本国内の研究・教育水準の向上や多様化が一因を成していると思われます。それでも私は、特に研究に携わるポスドクや学生には、留学をおすすめします。様々な人々と意思疎通し自分の研究とそれを取り巻く環境を俯瞰することは、世界における自分の立ち位置を理解し、

研究方針を確立する上で大きく役立つはずです。私はこの様な経験の積み重ねが新たな学術領域や技術の開拓につながると信じています。ポスドクという段階で留学を経験できたことを、私はとてもありがたく思っています。

IBMC の外観（旧エントランス側から撮影）
現在は建物の反対側にメインエントランスがあります